

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370739

研究課題名(和文) 学びのプロセスに基づいた現役英語教員研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Developing teacher education program for Japanese teacher of English based on their learning processes

研究代表者

栗原 ゆか (Kurihara, Yuka)

東海大学・清水教養教育センター・准教授

研究者番号：50514981

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は中・高等学校に勤める英語教員を対象に実施されている海外研修において、(1)研修中参加教員は何を学んでいるか、(2)研修後参加教員が学んだ理論的・実践的知識を各自の学校現場に合わせて実際にどのように専有しているかについて調査した。研究参加者は、研修プログラムの講師2名、プログラムコーディネーター2名、そして海外研修に参加した中・高等学校英語教員3名である。主な研究方法として授業参観とインタビューを行い、同時に授業関連資料も収集した。教員は、研修で学んだ知識を専有する際、様々な活動場所を利用しながら授業を行っていた。例えば、学校環境、過去に受けた研修、英語教育に関する信条などである。

研究成果の概要(英文)：This study examines (1) what junior and senior high school English teachers, who participated in the overseas teacher education program for two weeks, learned in the program, and (2) how they appropriated what the program offered into their own teaching practices after they returned to Japan. The participants of the study were: two program instructors, two program coordinators, and three Japanese teachers of English. The qualitative data were collected mainly through interviews, classroom observations, and other teaching related materials. The main findings of the study suggest that the three participants appropriated some pedagogical knowledge the program offered by making use of various social settings, including school cultures, their past teacher training programs, and their own beliefs about English teaching and learning.

研究分野：言語学・外国語教育

キーワード：海外研修 教師教育 アプロプリエーション 文化・社会的発達理論 ヴィゴツキー 現役英語教員

1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまでに米国で実施された中・高等学校の英語教員を対象とした海外研修(MEXTプログラム)を例に、研修後の教員の学びの過程をアンケート、授業参観、またインタビューより調査してきた。これらの研究から、教員の研修ニーズ(Kurihara, 2006)や、教員の学びの過程における段階モードを明らかにした(Kurihara, 2007)。その後、研修で学んだ知識を学校現場で円滑に応用している教員にさらに協力を仰ぎ、学んだ知識を専有している要因を質的研究より究明していった。これらの研究から、教員の学びは複合的な要素また活動場所(例えば、教員の教育信条、学校現場、教員研修、学習者としての経験)が複雑に関与していることが明らかになった(Kurihara, 2013)。

しかしこうした研究を通し、過去に行った研究の問題点が鮮明になった。とりわけ、教員の学びの過程を解明するためには、回想による間接データだけではなく、教員の活動場所における直接データを収集することが重要である。例えば「研修中何を学んだか」に関する調査は教員の学びの過程を調べる際の基礎となる部分である。そのため、研修参加者が研修場所や学校現場で実際何をどのように学んでいるかを直接調査しデータを収集することに至った。

近年北米において、ヴィゴツキーの社会・文化的アプローチを応用した教師教育研究が盛んに行われている。こうした研究は教員の学びの本質について解明しようとしており、第二言語教育分野においては特に効果的な教員研修開発のため“a professional knowledge base”について議論されている(e.g., Johnson, 2006; Yates & Muchisky, 2003)。日本国内でもヴィゴツキーの発達理論は英語教育の分野で議論され始めているが(新城, 2008; 西野, 2010)、教員の学びに焦点をあてた研究は少ない。そのため、教

員の学びを包括的また長期的に探究することができる社会・文化的アプローチを枠組みとし、日本人英語教員の学びの本質を探究することとした。

2. 研究の目的

過去に実施した教師研究の結果から、日本人英語教員の学びの過程には複合的な要素(例えば、教員個々の教育信条、学校文化、教員研修、学習者としての経験、専門知識など)が複雑に関与していることが分かった(Kurihara, 2013)。しかし、こうした研修後の研究は主に研修参加教員の回想記録によるものであった。従って、本研究では研修中教員が何を学び、そして研修後教員の学びが実際の活動場所でどのように起こっているかについて直接的データより調査した。以下、本研究の学術的問いを記す：

(1) 海外研修中、中・高等学校の英語教員は何を学んでいるか。

(2) 研修参加教員は、研修後学んだ専門知識を各自の学校現場に合わせ、どのように自分のもの(専有)としているか。

3. 研究の方法

教員の学びの過程を様々な活動場所より包括的に検証するため、本研究は上記の問いを質的研究(主に授業参観とインタビュー)により解明した。主な研究参加者は、オセアニア地域の総合大学で実施された教員研修に参加した中・高等学校英語教員3名であった。また、質的研究の信頼性(Lincoln & Guba, 1985)を高めるため、教員の活動場所に関わる関係者の視点(海外研修プログラムのコーディネーターと講師)からも教員の学びの過程を検証した。具体的な研究方法を以下に記す。(1) 海外研修における授業参観を2週間実施した。(2) 研修プログラムの責任者2名と講師2名のインタビューをそれぞれ1回ずつ実施した。また(3) 中・高等学校の英語教員計3名の授業参観とイン

インタビューを実施した。そのうち2名はそれぞれ3時間と5時間授業参観をし、インタビューはそれぞれ3回行った。もう1名は1回授業参観を実施し、インタビューも1回実施した。その他、海外研修の関連資料、また各教員の授業で使用した資料を随時収集した。

4. 研究成果

現役英語教員を対象とした教員研究は現在様々なレベルで実施されている。例えば国、県・市町村の教育委員会、また学校が主催しているものから、個々の教員自らが希望し参加する研修などがある。本研究で調査した研修では、アジアを中心に様々な国の英語教員が参加しており、国内のみならず国外の教員と共に授業が行われた。以下学術的問い2つに対する研究結果を記す。

(1) 海外研修中、中・高等学校の英語教員は何を学んでいるか。

プログラム責任者のインタビューより、研修では以下4つが重要視されていた：「個人レベルまた職業レベルにおいて知識を高める」、「自国・他国からの教員と意見交換をする」、「(研修が実施された国の)社会・文化を知る」そして「研修中英語を使用して過ごす」。また実際の授業においては、英語教授法、リフレクション、peer-teaching、地元の小・中・高等学校の授業参観、大学教員によるレクチャー、そして文化・社会探索が強調されていた。研修で教員に提供された知識・スキルは、理論的道具と実践的道具の両面があったが、主には実践的道具が教えられていた。理論的道具の具体例としては、ラーニングスタイル、リフレクティブラーニング、fluency、教授内容を生徒の日常に結び付ける等があった。実践的道具の具体例としては、ペア・グループワーク、小道具、タスク、リフレクション、ティーチング・ストラテジー、ゲームなどであった。研修講師は、毎回授業で実践しながら教えており、学んだ理論的・実践的道具を

実際の授業でどのように応用できるかを具体的に示していた。

(2) 研修参加教員は、研修後学んだ専門知識を各自の学校現場に合わせ、どのように自分のもの(専有)としているか。

2名の参加教員は、今までに参加した研修(県・市)や勉強会で得た知識に今回の海外研修を積み重ね、自分の生徒・学校文化に合うように様々なツールを工夫し授業で活用していた。もう1名は、過去の学びの活動場所から得た知識を利用し海外研修で学んだ教育的道具を精査しながら自分の生徒・学校に適した授業を行っていた。こうした専有プロセスから言えることは、前回の長期研究と同様に、英語教員の学びは、色々な活動場面が複合的に関与して行われていることが分かる。本研究参加者の主な活動場所は、過去の勤務校における教員としての経験、現在勤務する学校の教育目標や生徒、国内(県・市・学校)また国外で実施された教員研修、英語教育分野に関する教員個々の信念などであった。こうした様々な活動場所が、研修で学んだ知識の専有過程に複雑に関与していた。また、本研究の結果より明らかになったことは、授業の振り返りにおいて、研究参加者から理論的道具の指摘が多く聞かれなかった。理論的道具はそれぞれの教員の授業活動の理由づけとして重要な部分であるため、この点でどのような研修がより効果的か、今後の研究課題として取り組みたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Yuka Kurihara, Changing view of EFL teaching and its impact on Japanese English teachers' professional development, *JACET* 言語教師認知研究会研究収録 (*Language Teacher Cognition Research Bulletin* 2017), 2017, pp.42-50 (査読あり)

Yuka Kurihara, Enhancing English Teaching through Teacher Collaboration: Case Studies of Secondary School Teachers in Japan , JACET 言語教師認知研究会研究収録 (Language Teacher Cognition Research Bulletin 2015), 2015, pp.44-53 (査読あり)

〔学会発表〕(計5件)

栗原ゆか アプローチの視点から見た英語教師の学び：海外研修を例に、JACET 言語教師認知研究会・第33回研究発表会、平成30年1月27日、東京

栗原ゆか 現役英語教員を対象とした海外研修の現状：理論的・実践的ツールについて、JACET 言語教師認知研究会・第32回研究発表会、平成29年1月28日、東京

栗原ゆか 高校英語教員の学びの過程 社会文化的理論からの考察、関東甲信越英語教育学会 第39回山梨研究大会、平成27年8月9日、山梨

Yuka Kurihara, A Longitudinal Case Study of Japanese EFL Teachers Returning from the U.S. Teacher Education Program, The American Association for Applied Linguistics, 平成27年3月21日、トロント、カナダ

栗原ゆか 現役英語教員の学びの過程とその要因：海外研修を例に、JACET 言語教師認知研究会、平成27年1月24日、東京

〔図書〕(計1件)

栗原ゆか「英語教員の学びの過程が教員研修に示唆する点」『言語教師の認知の動向 (Trends in Language Teacher Cognition)』、笹島茂・西野孝子・江原美明・長嶺寿宣(編著) pp.137-149、2014、開拓社、東京

6. 研究組織

研究代表者

栗原 ゆか (KURIHARA Yuka)

東海大学・清水教養教育センター・准教授

研究者番号：50514981